



特集

利根川河口堰五十周年 今昔物語

群馬県の大水上山を水源とし、関東平野の四県を流れて太平洋へと注ぐ利根川は、日本最大の流域面積をもつ大河川です。昭和三十年代から首都圏の水需要が急激に増加する一方で、渇水が頻発し、利根川では流量が減少した川に塩水が河口から約五十キロまで逆流し、農作物が被害を受けるとともに、水道用水などの生活用水も利用できなくなる事態となりました。このような状況の中、渇水や塩害、さらには増加する水需要に対応するため河口堰建設の機運が高まり、利根川河口から上流に約十八キロ遡った地点で、昭和四十年十一月から利根川河口堰の本体工事に着手、六年の歳月を経

て完成、昭和四十六年四月から管理を開始し、令和三年四月で管理開始五十周年を迎えました。

その間、利根川河口堰は利根川下流部の塩害の防除をはかるとともに、上流側の水位を安定させることにより、都市用水を東京都、千葉県、埼玉県、銚子市へ、また、千葉県の北総東部地区の農地に、農業用水を供給してきました。五十年の間においては、東北地方太平洋沖地震のような大きな地震もありましたが、河口堰はその機能を損なうことなく役割を果たしてきました。次の五十年も引き続き、河口堰が担う重要な役割を果たしていきます。

坂東太郎と呼ばれた利根川に河口堰が建設され、管理開始五十年を迎えられたこと、心からお喜び申し上げます。

当時完成した河口堰は国内最大規模を誇り、東洋一と謳われました。河川技術の粋が尽くされ、地元東庄町としても誇らしい限りでありました。完成により、利根川下流域一帯の塩害が防止され、都市用水・農業用水が確保されました。農業用水としては、河口堰上流の黒部川から大利根用水により水を引き、町の農地だけでなく、旭市・匝瑳市・横芝光町まで遠く離れた広大な平野、約七千ヘクタールを潤すことが可能になりました。また、堰の管理橋として県道橋が架設されたことにより、千葉と

茨城両県を結ぶ大動脈となり、周辺地域を大いに発展させることとなりました。東庄町も昭和四十年代に著しく人口が増加しており、これは、茨城県の工業地帯で働く人の多くが家族連れで東庄町に居住してきたことによります。現在は少子高齢化の影響で人口が減少していますが、町の工業団地から河口堰を渡る北ルートと呼ばれる道路建設も進んでおり、人や物資の交流循環に大きく貢献するものと期待しております。

利根川河口堰は、常陸利根川・利根川・黒部川の流れが一つになる場所に位置しており、景観も見る事があります。また葦の茂る広大な河川敷は、全国でも限られたコジュリンの生息地となっております。東庄町でも、川や河川敷を活用した事業を行ってきました。河川



利根川河口堰 50周年記念ダムカードの配布を予定しています。詳細はホームページでご確認ください。

利根川河口堰 (建設当時) NAWI MB 管理開始50周年記

利根川河口堰 50周年記念ダムカード

利根川河口堰

利根川下流 総合管理所

飾っている植物は、オムラサキツツジ(中央下部の花)とセンリョウ(赤い実のある植物)。オムラサキツツジは東庄町の花、センリョウは神栖市の花をモチーフとしています。

夢の懸け橋

利根川河口堰管理開始五十周年を迎えて

東庄町長 岩田 利雄



敷に整備した「コジュリン公園」では、コジュリンをはじめとした、野鳥の観察会を開催しました。また、まっすぐに伸びる堤防を活用し、マラソン大会を開催したこともあります。参加者は走りやすい直線コースに、好記録を狙って力走を見せてくださいました。そして、折々の記念行事として花火大会も企画し、夜の川面に大輪の花を咲かせました。今後も、町民が河川と親しめる企画をしていきたいものです。

これからも河口堰の安全な管理に努めていただき、自然と共存し、地域の発展につながるよう、ご協力をお願いいたします。



1970s



2020s

第四ブロック下流からの全景

利根川河口堰 今昔写真真集



1970s



1970s



1970s

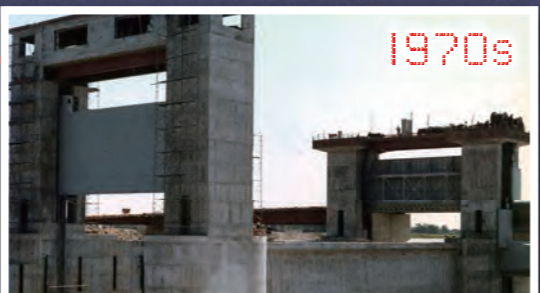


2020s

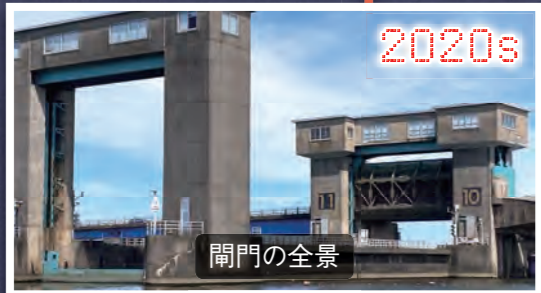


2020s

閘室内から上流を望む



1970s



2020s

閘門の全景



2020s

七・八号制水・調節ゲート(上流側)